

# 地域色の可能性の考察

杉山朗子

非会員 日本カラーデザイン研究所 (〒113-0033 東京都文京区本郷三丁目5-2,  
E-mail: akk-21-sugiyama@ncd-ri.co.jp)

近年の歩道整備を見ていると、地域が異なっても同じような素材、例えばグレー系のコンクリート平板での整備等が多い。景観の基盤となる土木の素材は全国統一でレベルアップするという考え方も広まっているが、まちの色彩の独自性などは、意識されにくい足元や小規模の建築物の外壁などによって構成されていることも多い。そこで地域性を表す色はあるのかという可能性について考察する。

キーワード: 景観色彩, 歩道の色, 地域色, 環境色調査, ワークショップ, 時代変化

## 1. 研究概要

### (1) はじめに

東京都内では2020年のオリンピック・パラリンピックを見据えて道路他の整備が進み、2014年の環状2号線の一部開通などが話題である。耐震補強や修繕の周期なども重なって修繕も多く行われている。その他の都市でも、バブル期に多く行われた整備が耐用年数を超え、補修・改修を進めるところが多くなっているように思われる。色彩においては、景観計画等で地域や周辺環境に合わせた色彩などが推奨されているが、なかなか検討自体実施されにくいように感じられる。建築は言うにおよばず土木構造物や工作物ではさらに手間をかけずに広く一般的に使用されているものを選定する傾向があるのではないだろうか。景観の基盤となる土木構造物及び工作物こそ地域性に対して配慮されると効果があると考えため大変もったいない傾向かと思ひ、いくつかの環境色彩調査事例、さらにワークショップの事例も参照しながら、地域らしさを表す色彩の検討の可能性を探ることとした。

### (2) 事例紹介-山形市

山形市の中心商業地区では新幹線開通の1992年に観察された舗道がこれまで継続使用されていた。1990年代は、ややカラフルで特産の紅花やサクランボを思わせる赤紫系の色や茶系などが用いられていた。2015年くらいから駅前整備はグレーになってきたが、オフィスビル中心の場所性に合わせた計画と思っていた。2018年中心部での歩道整備も同様の明るいグレーで行われ始めた。集客は減少しているとはいえ商業地区の中心部で、ビジネスライクで無機質な印象が強調されたようで、地域性、場所性ともに疑問が生じた。

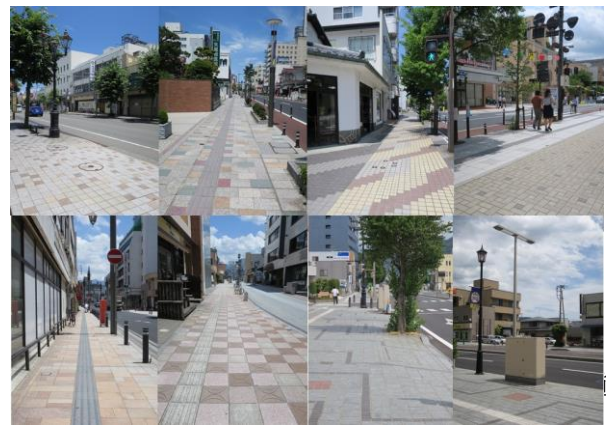


図-1 1990年代からこれまで継続していた山形市街地の舗道。



図-2 2018年ライトグレーに変化している整備状況。

### (3) 研究概要

#### a) 環境色調査による地域の比較

- ・景観計画の背景とされた現状色彩調査に見る地域性
- b) ワークショップからの地域色の抽出
- ・焼け残った東京下町の色

## 2. 環境色調査による地域の比較

### (1) 景観計画の背景とされた現状色彩調査に見る地域性

#### a) 福島県会津地方と千葉県内房地域の比較

景観計画を策定するために、地域の環境の色彩を調査



### 3. ワークショップからの事例-東京下町の色

#### (1)実施地域

対象である台東区台東・小島・鳥越周辺は東京大空襲を奇跡的に免れ、大正後期から昭和初期の町割りを残した地域である。東京で下町と呼ばれる地域でこれまで使われてきた色や素材の参考となると考えられる。

#### (2)実施日時

2016年11月5日(土曜日)開催

参加者 台東区内在住・在勤者中心41名

#### (3)ワークショップのフロー

##### a)事前準備

事前に区分した地区ごとに建築物、建築外装材、窓・入口などファサード構成要素、看板、植栽などを撮影した写真を用意

##### b)まち歩き

ワークショップ当日午前-まち歩き/焼け残った地区中心ルートで実施

##### c)講義(当日午後)/色彩の基礎知識

グループワークグループ毎に担当地区の写真の整理、色やデザイン等の特徴の抽出

#### (4)ワークショップのまとめ/各グループが発表した内容

##### a)江戸と東京の中心での暮らし

大きな通りから見るとオフィスビルの連続のように見え、少し古めの大正～昭和初期の建物の一部が残っているだけなのだが、ものづくりや商いの中心となってきた大都市江戸そして東京の「まち」らしさが感じ取れる地域である。下町の代表ともいえる台東区の中でも、特に紙や木の工作所など、ものづくりの場と住まいが混在している、生業とともに住みこなす「まち」の姿がみられる場所と再確認された

##### b)新旧の調和「向こう三軒両隣」が息づくまち

古い建物と新しい建物が混在した街並みが続く。新しい建物も、以前と同じ区割りで建て直し、両隣や通りの建物になじむような色や形状にしているようで、新旧調和しながら、まち全体がまとまった印象となっている。「向こう三軒両隣」という言い回しそのものといえる。

##### c)“粋”が息づくグレイッシュカラー

「何か見るところあるんですかねえ」と言っていた参加者から、よく見ると、薄いあずき色のような色が用いられていて、実はエレガントで、さりげなく計画されているようであったり、3軒つながっているようなところでは、少しずつ色を変えているのだけれど、どれも淡くてグレーっぽい色で揃っていたりするのに気づいたと発表があった。図-12にみられるような長屋が残る街並みである。

江戸の昔から、目立つことは好まないのだけれど、見

えないところに気を遣う、そんな心意気-粋を感じるとの意見が出てきた。



図-9 東京大空襲で焼け残った地区 濃い色の部分が焼けなかった場所。1947年8月8日東京都台東区USA米軍撮影 国土地理院地図・空中写真閲覧サービス。

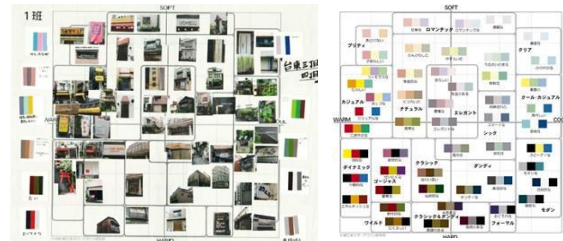


図-10 グループワークまとめ事例-右のカラーイメージスケールを用いて色彩の視点から写真整理。



図-11 グループワークまとめ事例-今後残したい特徴やデザイン要素。



図-12 “粋”が息づくことされたグレイッシュカラー。

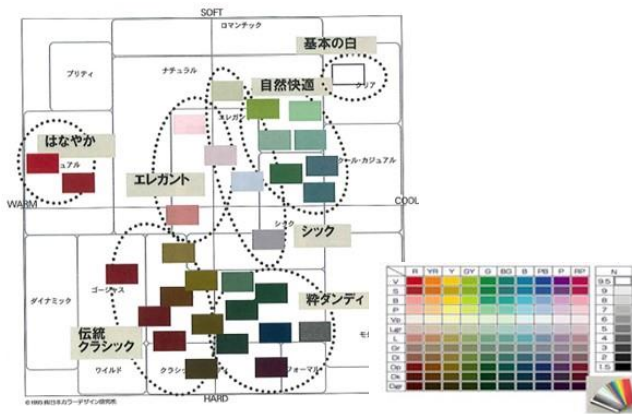


図-13 残したい色・活用したい色のイメージスケールと使用した10色相12トーン無彩色10色合計130色の色票。

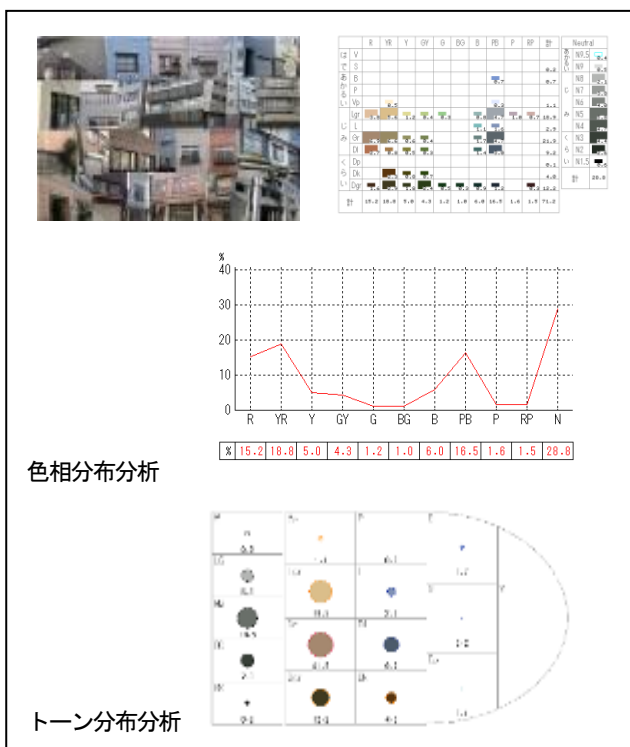


図-14 色の使い方の確認一の写真による色彩分析一覧。

#### d) 看板建築

大正末期から昭和初期の東京では、町家の正面だけ洋風な意匠を凝らした「看板建築」が作られ、モダンな街並みだったろうと思われる。この小島周辺は焼け残った地区のため、今でもいくつか残されている。左官仕事による洗い出しなどの素材、紋章のようなデザイン、縦型で洋風な窓枠、銅板葺きなどが特徴的である。

#### e) 緑の気遣い

狭い道に面して建っているのに、余裕は少ないはずだが、様々な工夫をしながら、緑が配られているのが発見された。緑があると親しみやすい空間になるものだ、という感想多く出てきた。どの地区も店の前や、隣家との

間のちょっとした空間に植栽を工夫している。最近目にするのが減った八つ手などの樹種も多くみられた。日陰でも育つ類を古くから選んでいるようである。

#### (5) まち並みの色 残したい色, 活用したい色

各グループで残したい色活用したい色として挙げられて色票を整理したのが図-13である。

淡いあずき色のような色も多くエレガントなイメージともとらえられた。江戸好みであった「ねずみ」という色も思い出させてくれるグレーが多くみられる

#### a) 木の色

古くからの木造建築も残り、また木枠や建具だけ残して活用している事例もあるようであった。長く使い込まれた木の色が多く見られ、木も活用していきたい素材として挙げた。

#### b) 緑の色

緑のバリエーションが数多く出された。改めて路地の緑、建物と緑などに注意が向いたのだと思われる。東京の下町は敷地が狭く密集し、緑にとって恵まれた場所ではないからこそ、工夫して、大切に育てていることを継続させたいとのことだった。

#### c) おだやかな色の集まり

スケールでは左右が空いていて、中央のゾーンに色が集中している。左側は、はなやかゾーン、右側はさわやかゾーンという範囲である。中央はおだやかゾーンで、今回のワークショップで注目されたのは、おだやかな色の集まりだった。

#### (6) 色彩の使い方の確認

現地の写真から台東区三丁目の色彩傾向を確認してみた結果が図-14である。ここでは写真から色相とトーンを分析するソフトを用いた。色相とトーンの種類は日本カラーデザイン研究所のカラーシステムに準拠している。

ワークショップでのまとめ同様、低彩度及び無彩色の比率が多くを占めているのがわかる。また、R系のピンクがかかった低彩度カラーが多くみられるのは特徴といっていだろう。

## 4. まとめ

現地での調査及びワークショップでは精緻さに違いはあるが、現地での調査は「地域色」の抽出の可能性を持っているといつてよいのではないだろうか。

現地調査では、自然環境色・社会環境色・文化環境色の3つの観点から測色していくと、いずれかで地域性を表している色彩を把握できる。

ワークショップではラフな結果ではあるが、見出した色についての感想や今後への期待などの意見を得られるメリットを感じる。まちづくりのメソッドとしてのワー

クショップ手法とは異なるが、色について考察を行うと地元の人々にとっても説明資料になりやすい。

大きな構造物や景観の基本となりやすい工作物の計画の際には、必ず現地の色彩の傾向について調査考察するステップを組み入れてほしいと改めて感じる。

今後さらに地域の伝統的建築物にみられる素材の色の特徴や、自然景観の色の特徴の抽出を継続していこうと考えている。

## 5. 今後の課題

### (1) 時代による変化

時代により、機能性や使い勝手により好まれる素材がある。そのようなものを使うことによって全国どこでも同じになる傾向は、以前より東京化したなどと言われたようにずっと継続していることである。交通や情報網の発達などで、情報や人の交流が盛んになると文化は均質化されやすい。そういった変化の中で「地域らしい色」は少なくなる傾向と言えよう。

金沢市の事例を参考に見て行こう。1960年代からまちの景観に配慮し、素晴らしい景観資源を保全、さらに新しく創り上げてきた町である。これまでは木造建築、古い商家の設えを大切にしてきたため、茶系のビルなどを中心にまとまってきた。近年新しいビルは白系が多く、看板や暖簾も広告物の考え方から白地の看板が多くなって金沢らしい風情や伝統感が薄れてきているように観察される。新しい計画の中でもこれまでの茶系の色を活かしたデザインは可能ではないかと思われる。色は、オリジナリティや地域性を伝える要素として役立つものの一つである。再度の取組みを願いたいものである。

### (2) 自然景観における留意点

照明柱などの色彩検討の際に、ケヤキ並木であればケヤキの樹皮の色などを参照する方法などを推奨したりもしてきた。樹皮の色は測色すると 10YR~2.5Y などが多くみられる傾向であった。東北地方に多いブナ林では新緑の色が非常に鮮やかな、高彩度かつ高明度の色を示し独特なため山全体を見る際には注目していたが、地元出身の建築家から間近で樹皮の色を観察すると、独特であると教示された。日本塗料工業会の色票による視感測色では色相は 5Y、明度は 6.5 から 7.0、彩度が 0.5 というコンクリート打ち放しに類似した色であることが確認された。これほど違っていると東京などで用いられている色を東北に持ち込んでも調和させにくい可能性は高いと言えよう。

景観の色彩の検討の際には、現地で主要な要素となっているものの色を測定することは重要であると言えよう。



図-15 金沢市で2010年くらいまで建物や看板によく見られた茶系の色。タクシーも茶系であった。



図-16 2016年増え続ける白い建物。タクシーも白地を多くし茶色使用はマークのみに変更。



図-17 青森県ブナ林の樹皮の色の測定 2018年。

謝辞:ワークショップを企画・実施していただいた台東区都市づくり部都市計画課の皆様および有意義な示唆をくださった区民他の参加者の方々に多大な感謝を申し上げます。

### 参考文献

- 1) 杉山朗子, 田村真知子, 宮岡直樹, 滝沢真美: 地域イメージを活かす景観色彩計画, 学芸出版社, 2008
- 2) 杉山朗子: ワークショップによる「まちの色彩」の把握手法-2013~2016 台東区の事例より, 日本色彩学会第49回全国大会[大阪]発表論文集, Vol. 42 No. 3 Supplement (修正版), pp. 138-141, 2018